

志々島ムーブメント

特集

志々島のいまを支える人々

瀬戸内海に浮かぶ、志々島。
17人が暮らす小さな島に
いま大きな変化が起きているのを知っていますか？



食べる旬ナビ Vol.1

シャインマスカット

皮ごと食べられ、爽やかな甘さが特徴のシャインマスカット。種がなくて食べやすいこともあり、近年人気上昇中です。
ぶどう栽培歴50年以上の藤林さんにおいしく育てる秘訣を聞くと…。「たくさん実をつけると味がのらないので、生育状況を見ながら適切に摘果するのが大事」。最終的に、1本の枝に残る房は1つ以下に厳選されます。その結果、実は甘くなり、さらに糖度17度以上のぶどうのみを出荷。
ぶどうの中では少し高級クラスですが、一粒食べると納得の幸せを感じられますよ。



収穫は朝4時。果肉の温度が上がらないうちに摘み取ることで日持ちします
藤林忠義さん (高瀬町)

房の上部が特に甘いですよ

三豊市の人口 ※平成28年8月1日現在 ()内は前月比
世帯数 22,906 世帯(+5) 総人口 65,006 人(-39) 男 31,072 人(+11) 女 33,934 人(-50) ※香川県人口移動調査による

広報みとよ 9月号 目次 contents

- 3 特集 志々島ムーブメント
- 12 eM's Information みとよ暮らしのおしらせ①
法務大臣感謝状 / 住宅リフォーム補助金2次募集 / 国道の工事にご協力を / マイナンバーカード申請受付
- 14 みとよHOT ほっとNEWS(ホットニュース)
- 16 eM's Information みとよ暮らしのおしらせ②
敬老祝金 / 福祉タクシー券 / 税金の滞納整理 / 乳児のB型肝炎予防接種 / 児童手当現況届 / 国民年金 / がん検診・健康診査 / 乳がん検診 / 歯周病検診 / 国民健康保険被保険者証の再交付申請 / 仁尾八朔人形まつり / 月見の宴 / 七福求めてぶら〜りみとよ / つくるフェスティバル in みとよ
- 21 eM's 深読みひろば
じんけん探訪 / 瀬戸芸の舞台裏
- 22 9月のお知らせ
募集 / 相談 / 講座・教室 / イベント / 納税のお知らせ / マリンウェーブ情報 / 国際交流協会
- 25 保健・相談
- 26 ここ笑み通信 ~子育てするなら三豊が一番!~
旬の・穴場のおそばレポート / ウィズの会 / こどもつど。完成 / eM's smile ふおとぎやらしい / 乳幼児健診 など
- 28 みとよ写真帳 / 編集後記

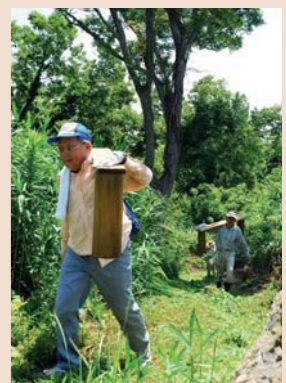
表紙 今月の市民力



▲新しく設置したベンチを囲む、志々島大楠ボランティアの皆さん。年2回、大楠の草刈りや遊歩道の整備もしています。

この日参加した吉久康徳さんは「以前、志々島に訪れたときに寺下さんが横尾の辻までの道を整備しているのを見かけ、それ以来、彼が思い描いていたことに協力したいと思うようになりました。設置したベンチは、腰かけて景色を見たり、食事をしたりといろんな楽しみ方ができます。ここでゆっくりと島の時間を過ごしてほしいですね」と話します。屋間に瀬戸内海を見渡すもよし、夜、星空を眺めるもよし。島の名所、横尾の辻が志々島大楠ボランティアの会の皆さんによって、より充実した島のスポットになっています。

志々島で、夜景を眺めたことはありますか？
表紙の場所は、志々島で一番標高が高い「横尾の辻」です。そこに6月、2台の大きなベンチが設置されました。これは「島に訪れた人に、ゆったりと景色を見てほしい」という、島民の寺下忠清さんの声から実現したものです。このリクエストを受けて動いたのが、志々島大楠ボランティアの会の皆さん。当日は、詫間町内と志々島などから12人が設置に駆け付けました。組み立て前のベンチを担いで急な坂道を上るのはひと苦労。やっとの思いで横尾の辻まで運んだ後、南北2カ所に設置しました。
この日参加した吉久康徳さんは「以前、志々島に訪れたときに寺下さんが横尾の辻までの道を整備しているのを見かけ、それ以来、彼が思い描いていたことに協力したいと思うようになりました。設置したベンチは、腰かけて景色を見たり、食事をしたりといろんな楽しみ方ができます。ここでゆっくりと島の時間を過ごしてほしいですね」と話します。屋間に瀬戸内海を見渡すもよし、夜、星空を眺めるもよし。島の名所、横尾の辻が志々島大楠ボランティアの会の皆さんによって、より充実した島のスポットになっています。





▶改修前のいせや。床を支える基礎もだいふ傷んでいました

3人は宿泊施設を目指して3軒の空き家の整備に取り掛かります。そのうちの1つが、かつて網元として栄えた「いせやの名家」。築150年を超える古民家は、70年前から空き家となり、長年の雨漏りのため床が抜けるほど荒れた状態でした。

「改修前の状態を見たとき、こ

島の元網元「いせやの名家」をよみがえらせた

んとは、仕事で島の空き家を調査しているときに知り合います。山地さんから空き家を使った宿泊施設の構想を聞いた井出さんは、その熱意に触れ、自分の得意分野を生かして協力したいと思い、2人の仲間に。こうして平成27年4月に志々島振興合同会社が始動しました。

島の人口を30人に増やしたい まずは島に宿泊施設を

志々島振興合同会社



▲(左から)志々島振興合同会社の北野省一さん、井出喜久美さん、山地常安さん。空き家だった古民家を改修して、現在は交流スペースとして活用している「いせやの名家」にて

れは無理やろうって、私を含めたみんなが口をそろえて言っていました」

井出さんは初めていせやを見たときの印象を、こう振り返ります。しかし、山地さんにはいせやに対する強い思いがありました。

「志々のいせやか、いせやの志々か」と唄われていたいせやは志々島の人にとって別格の存在。自分たちの手で直したい」

この思いに込め、みんなできるところから直し始めることに。使えるようにするためには、雨漏りする屋根の応急処置や床板の張り替えなどをしなければなりません。改修には450万円が必要でした。そこで資金調達の手段として望みをかけたのがクラウドファンディングです。クラウドファンディングとは、活動に共感してくれる人たちから少しずつ支援金を集める仕組みのこと。目標はまず100万円。平成27年11月から平成28年1月末まで、インターネットのサイトを通して全国から支援金を募りました。マスクミで取り上げられたこともあり、3人の思いに賛同した人が次第に増えていきます。蓋を開けると、目標額を大きく上回る179万1000円

自分たちの手で挑んだ古民家改修

が105人の支援者から集まりました。

集まった資金をもとに、山地さんと北野さんはいせやの改修に取り掛かります。1月末には島への移住希望者を対象とした、島暮らし体験イベントがこのいせやで予定されていました。

「お金をかけたら簡単に直るけど、資金には限りがある。できるだけ自分たちの力で直そう」

そう決めた山地さんと北野さんは、寒さの厳しい12月から1月にかけて、大掃除から始め、屋根の修繕や、ふすま・障子・畳の入れ替えなど、骨の折れる作業の数々をこなしました。そして、なんとか会場部分の改装が間に合います。イベント当日には、県内外から約



▲雨漏りしていた屋根は自分たちで瓦を付け替えました

周囲3.8kmの小さな島、志々島。江戸時代後期から漁業の島として栄え、戦後は除虫菊や唐辛子などの栽培が盛んに行われました。最盛期の島民は1,000人超。しかし、現在は過疎化が進み、島で暮らす人はたった17人に。このまま島から人が減り続ける現状をどうにかしようとしたのが、「志々島振興合同会社」の皆さんです。ここでは、島のにぎわいを取り戻そうと取り組む彼らの活動を紹介します。

島の空き家を活用した宿泊施設オープンを目指して

「志々島に宿泊まりできるところがあつたら…」

志々島振興合同会社の挑戦は、島民の山地常安さんの思いから始まりました。山地さんが漠然と宿泊施設の構想を抱き始めている時、島にある空き家3軒の活用について、所有者から許可が下ります。それから、この空き家を使って宿泊施設を作ることが山地さんの目標になりました。

その頃、島出身の北野省一さんが島に帰ってきました。島の人口が減り続けていること、宿泊施設を作りたいこと。山地さんから島の現状の相談を受けているうちに、北野さんはその思いに共感し、一緒に宿泊施設整備に乗り出すことにしました。そして2人は、3軒の空き家のほかに、民間会社が所有する施設も活用できないかと所有者と交渉するために、法人を立ち上げます。

詫間町で不動産会社を営む井出喜久美さんは、初めて大楠を見たときにそのパワーに魅了されたことがきっかけで、数年前から志々島に度々訪れていました。山地さ



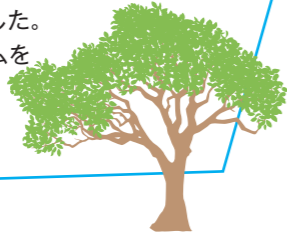
▶いせやを会場にした落語の寄席には大勢の人が集結

島暮らし体験イベントで2人の移住者が志々島に

この島暮らし体験イベントは、平成28年1月から3月までに計3回行われ、どの回も島に興味のある人が50人ほど訪れる大盛況。1泊2日の間に、島の暮らしを知るワークショップをしたり、茶がゆを食べながら島民と交流する時間を設けたり。志々島で暮らすということがどういうことを体感できるように企画しました。そんなPR活動を続けた結果、なんとイベント参加者の中から実際に移住したいとの声が！東京と大阪から来た2人が島で暮らし始めることになりました。

志々島暮らし1日体験

今まで気軽に宿泊できなかった志々島。島に宿泊施設ができたことで、これまで体験できなかった夜と朝の時間を過ごせるようになりました。今回は、三豊市の女子たちに島のリズムをほんの少し体験してもらい、その様子をレポートします。



▲「ゲストハウス きんせんか」に宿泊しました

今回志々島で過ごすのは、説間中学校時代の同級生3人組。近くに住みながら、これまで志々島に行ったことがなかった3人。初めての体験に胸を弾ませながら、宮の下港から船に乗ること15分。まずは、島の休憩所「くすくす」へ。島民の山地綾子さんが出迎えてくれました。ここでひと休みしながら、島の暮らしぶりについて山地さんと話をしていると、「人生はしたいことをしたらいいのよ。楽しく暮らせるならどこに住んでもいいんじゃない?」と深いお話も聞けて一同感動。



元気を補充して、いよいよ今晚のお宿「きんせんか」へ向かいます。ここは、島の空き家を利用した宿泊施設。素泊まり・自炊が基本のため、事前に食材も買い込んできました。懐かしい造りを残した宿で、ほっと一息ついていると、だんだんと夜も更けてきました。こ



の日は、たどつ夏まつりの日。行きの船で会った島民の寺下忠清さんに「8時半から花火があるよ」と教えてもらっていました。夜の志々島を歩いて、花火が見える防波堤まで。島の人々と一緒に、「音が遅れて聞こえてくるなあ」と言いながら、遠くに打ちあがる花火を眺めました。思いもよらないラッキーな時間を過ごし、心地よい疲れのまま、おやすみなさい。次の日は、島からの朝日を見るために早朝5時に起床です。寺下さんおすすめの朝日スポットからは、多度津方面から昇る朝日が見られます。「めっちゃ気持ちええな!」「ほんま癒されるわ」と思い思いに堪能する彼女たち。そのまま、せっかくだからと朝の大楠にも足を延ばし、清らかな大楠のパワーも十分に補給しました。こうして、船の時間を気にせず、1泊2日のんびりと島時間を体験した3人。島で出会った人々のやさしさに胸を打たれながら、志々島の温かい雰囲気魅了されて帰っていきました。



島のゆったりとした時間の流れに癒されました。島の人の親切もありがたかったです!



みちよさん まゆさん あやかさん
ゆうちゃん



①くすくすでアイスを食べてひと休み ②初めての太楠。その大きさに圧倒されていました ③島から眺める朝日は貴重な体験

目標の第一歩 島のゲストハウスが始動

宿泊施設候補の空き家3軒のうち、順調に話が進んだのがゲストハウスとして平成28年5月にオープンした「きんせんか」。家屋の状態が良かったこともあり、お風呂とトイレ、台所を整備すると宿泊できるようになりました。この敷地内には、母屋と離れがあり、離れには東京から島へ移住してきた小泉多恵子さんが住むことに。小泉さんには、ゲストハウスの管理もしてもらうことになりました。こうしてできあがった念願の宿泊施設には、今では日本国内だけでなく、台湾やアメリカ、フランスからも宿泊の予約が入っています。



北野省一さん
中学卒業まで志々島で暮らし、平成24年に東京から志々島に戻る

できるだけ多くの人に
来てもらって、島を知って
もらいたい

人口を増やすことが一番
将来は島で子どもたちの声を
聞きたい



山地常安さん
幼い頃暮らしていた志々島に
平成20年に夫婦で移住

願いは、人口を増やして島のにぎわいを取り戻すこと

7月13日(旧暦6月10日)、島にある十握神社でお祭りが行われました。境内の草刈りや清掃をして準備を整え、当日の参加者は島民10数人。

「十握祭りは、かつてはだんじりや獅子舞もある、とても賑やかなお祭りでした。島にはほかにも復活させていきたい行事がたくさんあります」
正月はどんど焼き、夏は七夕、秋には八幡神社のお祭りやお月見。人手がないため、今では姿を消してしまっただ島の文化。北野さんは、島に人を呼び込むことで

これらの復活を望んでいます。島を無人島にしないために今できることは...

志々島はこのままいくと近い将来、無人島になるのではないかと言われています。今、島で暮らす17人のうち、60歳以上は13人。高齢化も進んでいるのが現状です。

「放っておくと人は減るし、空き家は廃屋になる。無人島になったら手が付けられんから、今のうちに少しでも人口を増やしたい」

目標は人口30人。そのうち半数は島出身者によるUターンなどが見込めるのではないかと北野さん。あと半数を2、3年のうちにどう呼び込むかが課題です。



井出喜久美さん
説間町で不動産会社を営む傍ら、志々島振興合同会社の社員に

次の目標は、島の人
がいつでも行き来できるように
海上タクシーを走らすこと

は、現在、イベントを行うなど交流スペースとして活用されています。しかし、トイレやお風呂など直す箇所も多く、宿泊するにはまだまだ資金も手間もかかります。3軒目の空き家も宿泊できるように整備を進めたいところ。ほかに、島四国八十八カ所の復活や海上タクシーの整備など、島のためにやりたいことはたくさんあります。そして、最終的に目指すのは島の中に産業を作ること。移住してきた人が島外に出稼ぎに行かなくてもいいように、島でできる仕事を生み出したいと考えています。

「今は種をまく前の、荒れ地を耕し肥やす段階」
そう井出さんが言うように、長期的なプロジェクトが志々島で動き出しています。

「この歳になって思うのは、人のために役立つことをしたいなと思うと、不思議と必要な人や手助けに巡り合える」

これは山地さんの言葉です。実際に3人の活動に賛同した人がメンバーに加わり、志々島振興合同会社は現在4人で活動しています。彼らが島のためにと取り組むムーブメントに、次はあなたも巻き込まれてみませんか?

志々島に自分の居場所を見つけた人たち

「志々島だから、ここに住みたかった」。島に移住してきた人は、口をそろえてこう答えます。

志々島での生活を楽んでいる人たちが語る、島暮らしの魅力とは…？

Case.1

小泉 多恵子さん(46歳)

平成 28年 3月に移住
東京都出身

いつかしてみたかった島暮らし
志々島の雰囲気
自分にフィットしたんです

きっかけは、平成27年の5月、旅行で訪れた粟島の帰り道に、志々島にふと立ち寄ったことでした。もともと島が好きで、「なんとなく、いつか島に住めたら」という思いを抱いていたという小泉さん。大楠や横尾の辻を巡っていると、島で暮らすイメージが膨らんできました。そこで、帰り際に寄った島の休憩所「くすくす」で、早速、島民の山地綾子さんから島の暮らしぶりを聞くことに。

「山地さんも神戸から移住してきた方でしたし、先に移住していた咲子さんの話も聞きました。そのとき、山地さんには「住んだらいいじゃない」とさらっと言われたんです(笑)」

それから東京へと戻ったあとも、島のことや頭から離れず、山地さんと手紙のやり取りをしていた小泉さん。その中で、島に空き家があることを知ります。

「昨年の8月に、空き家を見に行きました。そのあとから、どんな気持ちか傾いて、不思議な縁があるのかな？ 今行くべきかも！と思うようになりました」

しかし、仕事を見つけて、生活していくことに不安もあったと言います。それから小泉さんは11月にも島に行き、島民の人々に話を聞いたりと、初めて島を訪れてから計3回、島に通いました。

「仕事もなんとか見つかるだろう。もし見つからなくても、しば



▲くすくすの山地綾子さん(右)とおしゃべりを楽しむ小泉さん(左)

Case.2

咲子さん

平成 25年春に移住
高松市出身

「ほんわかした霧囲気を漂わせる咲子さんは、島で生活を始めてはや3年。志々島での暮らしが初めての一人暮らしだと言います。」

「自分が使った水が、外の溝を通って、海に流れていくのを今まで見たことなかったんです」
小さな島だからこそ気づく発見も咲子さんにとっては新鮮でした。

そして、初めての畑仕事にも挑戦。今は家の裏の畑で、トマトやきゅうりなど、たくさんの野菜を育てています。島の人たちと一緒に、共同の畑でさつまいもを育てるのも楽しみの一つ。

「海、神社、大楠、畑…。志々島の好きなおところはいっぱいあります」と微笑む咲子さん。のどかな島に似合う、かわいい笑顔が印象的でした。

Case.3

籠本 真一さん(62歳)

平成 28年 4月に移住
大阪府出身

3年前、「男はつらいよ」のDVDを見たときに、志々島のことを知ったという籠本さん。今年1月に行われた志々島振興合同会社の島暮らし体験イベントに参加し、実際に島に来てみて、移

住を決めました。決め手となったのは、島に住んでいる人たちの人柄の良さ。

「みんな、相談したら助けられるし、何かしてあげたら、ありがとうと素直な気持ちを返してくれる。人間関係の良さが一番大事」

今は島での生活も落ち着いてきました。不慣れた面がありながらも、逆に自分で何もしなければならぬことにやりがいを感じている毎日です。ときには、島の人と一緒に草刈りをしたり、釣りをしたり。島の人々の中に溶け込んで暮らしています。

「これからは、みんなで1つのことができる、祭りや行事も手伝っていききたい」と、まだまだ島暮らしの楽しみは尽きません。



▲この日はお友達が咲子さん(手前)を訪ねて遊びに来ていました



▲寅さんのワンシーンが撮影された防波堤にて



①伸びた草は10センチ以上。男性陣が手分けして草刈り機で刈っていきます ②刈られた草をよけていく敬子さん ③横尾の辻の草刈りメンバー。(左から)高島達之さん、籠本真一さん、寺下敬子さん、寺下忠清さん、有木正さん

8月7日、朝7時。早朝とはいえ、立っているだけでも汗が流れる暑さのなか、横尾の辻で草刈りをする寺下さんの姿がありました。この日は奥さんの敬子さん、有木さん、島に住む籠本真一さん、お手伝いに来ていた島出身者の高島達之さんの5人で作業。道を維持するために、夏場でも月1回の草刈りは欠かせません。作業は、男性陣が草刈り機で刈

っていったあと、敬子さんが熊手で刈られた草を道の端によけていく、という連携プレーが進みます。途中でこまめに休憩をしながらも、なかなかの重労働。気温の高さもあり、服は汗でびっしょりになっていました。そして、5人で作業すること3時間。スムーズに行き来できる道がよみがえりました。こんなに大変なのに、どうして続けられるのかと寺下さんに尋ね

志々島のいまを支える人々
志々島は、島民一人ひとりも
ちろん、島を離れて暮らす出身者、
近隣からボランティアに駆けつけ
る人など、たくさんの人々によつ
て支えられています。
「島のために何かできることは」
この気持ちから生まれる活動に
触れると、知らず知らずのうちに
心が動かされていることに気付く
はず。
これからもたくさんの方が重
ななって、次のムーブメントにつな
がっていきます。



▲寺下さんが撮影した横尾の辻からの風景

ると、「意地かなあ」とさらっと一言。横尾の辻は寺下さんたちのやさしい「意地」によって、これからも維持され続けていきます。

「写真を貼り出したのは10年以上前。志々島は大楠だけじゃないよ、昔はこうだったんだよ、というのを知らせる必要があるんじゃないか」という思いから作り始めました。志々島を訪れた際は、ぜひ足を止めて、さまざまな志々島の魅力を見つめてみてください。



港に到着して島を歩いてみると、たくさん写真が迎えてくれます。「パネルロード」と呼ばれるこの通りに、

志々島のちよつといい話

三豊市から来ました。こんなにすばらしい所があるなんて知りませんでした。どんどん日本、世界にこの自然のすばらしさを発信し、三豊市(志々島)に人が来てくれますように...
(草刈りありがとう!)

朝まで降っていた雨もやみ、雲のかかった幻想的な景色に感激です。涼しい風に汗もひきました。大楠様も言葉に表せない!! 島と島の人たちを守ってくださいと手を合いました。
★歩きやすいように整備してくださってありがとうございます。



◀今、置かれているノートは3冊目

横尾の辻にある一冊のノート。ここには志々島を訪れた人々の感動の声がつづられています。志々島への温かいメッセージをちよつぱり覗いてみましょう。

よこぼ 横尾の辻物語

志々島で一番標高が高い場所・横尾の辻。
今では大楠と並ぶ、観光スポットの一つとして多くの人々が訪れています。
これは、この場所を人知れず整備する、島の人々の物語。



横尾の辻から見た詫間の風景

「島の三角点をもう一度、見てみたい」
有木さんのこの一言をきっかけに、それから寺下さん、有木さん、寺下さんの奥さんの敬子さんで毎週日曜日に少しずつ草を刈っていくことにしました。
「初めは草を刈っても2週間でまた生えてきよった。それを刈る

港から大楠へと向かう上り坂の途中、志々島の頂上へ行ってみませんか?と書かれた小さな案内板が立っています。この案内板から約15分、整備された道を歩いていくと、志々島の頂上、「横尾の辻」へたどり着きます。ここは粟島や高見島など、瀬戸内海の多島美が一望できる絶好のビュースポット。今では難なく通ることができそうですが、5年前までは草木が茂り、人が歩いて行ける状態ではありませんでした。それを整備したのが、島民の寺下忠清さんと有木正さんです。



「何十年か前に見た、横尾の辻からの景色をやっと見ることができた」
そう寺下さんは当時を振り返ります。かつて、島で畑作が盛んだったころには、島の中腹にある農道を通って横尾の辻へと行くことができていましたが、人が減り、畑が荒れだしてからは長らくたどり着けない場所になっていました。それが再び、3人の根気強い活動によって、島のてっぺんからの眺望を目にできるようになりました。

しかし、道を通った後も放っておくわけにはいきません。すぐに草が生い茂ってしまいます。寺下さんたちは今も定期的に草刈りをして、歩きやすい道を整備し続けています。

のを繰り返していくと、だんだん草の力が弱まってきてな
そんな気の遠くなる作業を続けて刈り進んでいくこと、1年。横尾の辻ま
での道が
つながり
ます。当
初の目的
だった三
角点も確認できるようになりました。



▲志々島の三角点